

## ■「鐘の鳴る街会津」事業～まとめ～

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり…」。平家物語の有名な一節にも語られる梵鐘。わたしたちは、朝・夕の時を知らせる鐘の音によって、一日を思い、感謝する日本的な情緒を育んできたともいえます。

また、人種や言葉、宗教の違いを超えて、人の心に響く鐘の音は、過去を癒し、未来の平和を誓うものでもあります。（鐘撞き事業がスタートした平成17年は戦後60年目の節目の年でした。）

かつて戦場となった会津の地から平和を願う鐘が鳴り響くことには意義があります。

落城のその日まで途絶えることのなかったという鶴ヶ城の鐘の音は、戊辰戦争から数えて140年目の今年も、わたしたちの心に響きました。

観光とは「国の光を観る」こと。地元の人が自分のまちを愛し、その暮らしぶりを観てもらうことではないでしょうか？消費のためだけの観光地ではリピーターは訪れません。

まずは、地域住民が自分たちの暮らすまちのことを深く理解することが大切であり、先人の心に思いを馳せることで郷土愛が生まれ、歴史を知ることが未来を築くことにもつながっていくのです。

会津の精神文化を誇りに思える人材の育成は、観光地『会津』としての大事な課題であり、当事業はそのきっかけとしての役割を担うものです。

まちづくりの将来的なビジョンは、行政だけでなく、市民とともに作り上げることが大切です。地域の檀家さんや町内会、子ども会、青年団などに参加を呼びかけたり、「絵ろうそくまつり」、「提灯行列」などのイベント時や、「終戦記念日」「原爆投下記念日」などの慰霊など、鐘撞き回数を増やし、最終的には毎朝夕、継続していきたいと考えています。そのためにも今後は、会津若松商工会議所青年部だけでなく、行政・観光・教育等の関係諸団体とも連携し、地域に浸透させるべく具体的な協力体制を整えていくことを提言します。

